

第8章 省略：あぶり出し術

英文が難解に感じるときの要因の一つに、英文の中に省略されている部分があるために文構造がつかめないということがある。ところが、省略ということすら気がつかずに適当に意識して間違えることがある。書かれていないのだから気がつかないのも無理はないが、英文の構造をしっかりととらえ、文法的になっていないと感じたら、まずは省略を疑うべきで。

では、その省略されているものを復元するするコツ、いわば〈あぶり出し術〉は意外と簡単で、すぐ前の文構造を確かめればよい。「省略はすぐ前を見よ」がこの章の合言葉である。なぜならば、英語は同じことを繰り返して述べることを避ける言語なので、同じことを二度述べるくらいなら、表現方法を変えるかカットしてしまうからだ。特に、**and** や **but** の後ろで省略が起こりやすい。その際に、第1章で学んだ、「**and/but/or** の前後は原則として文法的に同じ形になる」という原則が大いに力を発揮する。

次は東大の問題であるが、意味がわかるだろうか。

This sort of art, we learn in childhood, is meant to excite laughter, that to provoke our tears.

we learn in childhood は前後にカンマがあるので挿入ととらえ、全体の文構造からは外す。最後の **that to provoke** が文法的に変に思うのだが、文頭の **this** と **that** が対で使われることと、**to provoke** が **to** 不定詞であることに目をつけ、前文の **to** 不定詞の部分を探り、その手前の動詞を補えば、あぶり出し完成である。次の図を見れば、上下の線対称が明らかであろう。

This sort of art 〈we learn in childhood,〉 is meant **to** excite laughter,
(and) **that** (sort of art) (is meant) **to** provoke our tears.

「この種の芸術は笑いを誘うためのものであり、あの種の芸術は我々の涙を誘うためのものであることを、我々は子供の頃に身につける」